多賀町立図書館パスファインダー№５

令和４（2022）年３月 31 日作成

アケボノゾウを調べよう

『多賀はゾウの里だぞう』 多賀町立博物館／編集 多賀町教育委員会, 2020 L 095.78	「アケボノゾウの里」として知られる滋賀県多賀町。日本一のアケボノゾウ化石が発見された調査記録、多賀町に博物館ができるまでの経緯、新たに始まった「多賀町古代ゾウ発掘プロジェクト」の成果などを、４００点以上の写真やイラストを交えてわかりやすく紹介しています。 『アケボノゾウ発掘記』（１９９３年刊）の改題改訂。
『アケボノゾウ発掘記』 四手の丘陵に夢を掘る 多賀町教育委員会／編集・発行, 1993 L 095.78	平成５年（１９９３年）に発見された多賀町四手（しで）丘陵のアケボノゾウ発掘について様々なエピソードを交えて、その経緯を解説した一冊。当時の緊迫感が伝わります。
『180-190 万年前の古環境を探る』 多賀町古代ゾウ発掘プロジェクト事務局・高橋啓一／編集 多賀町教育委員会, 2017 L 095.71	多賀町四手においてアケボノゾウ全身骨格化石が発見されて２０年目の節目の平成２５年（２０１３年）に、多賀町立博物館は、アミンチュプロジェクト びわ湖放送＆藤井組（(株) まちおこし）との共催、琵琶湖博物館の支援協力で「多賀町古代ゾウ発掘プロジェクト」という調査団を結成し、再度、学術的な調査を実施しました。 新たな発見とアケボノゾウが生息していた当時の古環境を明らかにする目的で取り組んだ「多賀町古代ゾウ発掘プロジェクト」による２０１２-２０１６年の調査結果をまとめた報告書です。 地質学的な調査や、珪藻、花粉、植物、貝、昆虫、脊椎動物、足跡などの化石についての古生物学的調査の成果が詳しくまとめられています。
『一次発掘調査のまとめ』 発掘２０周年記念企画展 「アケボノゾウ発掘から２０年～新たな発見を求めて～」 多賀町立博物館／編集・発行, 2014 L 095.71	アケボノゾウが多賀町で発見されてから２０周年を記念した企画展の解説書。発掘地の地層、脊椎動物化石や足跡化石、貝、昆虫、植物、花粉の化石などについて新しくわかったことを中心に、「多賀町古代ゾウ発掘プロジェクト」が取り組んだ第一次発掘調査の成果についてわかりやすく解説しています。
『多賀町文化財・自然誌調査報告書　第４集』 多賀町教育委員会／編集・発行, 1994 L 095.71 4	平成５年（１９９３年）度のアケボノゾウ化石についての事業報告や、多賀町四手の古琵琶湖層群より産出したシカ類化石や大型植物化石について記されています。

『多賀町史　別巻』 多賀町史編さん委員会／編集 多賀町, 1995 L 095.71	多賀町史は、多賀町の歴史を調べたいときの基本史料です。 上下巻からなる通史と史料などを編集した別巻があり、上巻は自然環境および原始古代から近世までの歴史、下巻は近代から現代の歴史で構成されています。 別巻では、アケボノゾウの化石発掘時の様子についての記載があります。
『ゾウがいた、ワニもいた琵琶湖のほとり』 高橋　啓一／著 サンライズ出版, 2016 L 457.8	大山田湖は、今から約４４０万年前に三重県伊賀市に誕生した琵琶湖の名前です。琵琶湖が誕生したこの頃から約３万年前まで、湖畔には肩までが４ｍもの巨大なミエゾウから小型のアケボノゾウ、そして中型のナウマンゾウに至るまで多くのゾウが棲んでいました。それらのゾウの仲間は、化石の調査により地球規模の気候変動とともに環境に適応しながら移り変わっていったことが、わかりやすく紹介されています。
『化石は語る』 ゾウ化石でたどる日本の動物相 高橋　啓一／著 八坂書房, 2008 457.8	大陸からやってきたゾウたちはなぜ日本から姿を消してしまったのか。 全国各地から得られるゾウやシカ、魚類や貝化石・足跡化石、植物化石から、日本列島を舞台に繰り広げられた動物たちの絶滅と進化の物語が紡がれています。
『近江の竜骨』 湖国に象を追って 松岡　長一郎／著 サンライズ印刷出版部, 1997 L 457.8	江戸時代、「竜の骨」とされた古代ゾウの化石発見が巻き起こす騒動、化石収集の先駆・木内石亭の業績、ドイツ人地質学者ナウマンの論文をめぐる明治の大論争など、琵琶湖周辺から産出したゾウの化石の研究史です。
『古琵琶湖の足跡化石を探る』 岡村　喜明／著 サンライズ出版, 2018 L 457.2	１９８８年の野洲川での足跡化石発見を契機として国内の足跡化石にはまり込んでいった著者。 古琵琶湖畔の動物たちが残した足跡化石などの調査について、写真や図を交えて綴られています。国内外の現生の動物たちについての調査も掲載。
『石になった足跡』 へこみの正体をあばく 岡村　喜明／著 サンライズ出版, 2000 457.8	足跡化石とは、古代の生物が移動した時に残したもので、そのへこみには「動の結果」が隠されています。足跡化石が風化し消滅するのを懸念し、研究・標本の保存を行ってきた著者が、これまでの調査・研究法の一端を解説しています。
『琵琶湖博物館研究調査報告　２６号』 「記録しておきたい滋賀県の地形・地質」編集委員会／編集 滋賀県立琵琶湖博物館, 2011 L 090.4 26	滋賀県内各地の重要な地形や地質、化石、鉱物に関する調査報告書です。 地図や写真などを用いて紹介されており、その内容は実に多岐にわたります。 多賀町四手のアケボノゾウ発掘地についての記載があります。

『滋賀県地学のガイド上・下』改訂 滋賀県の地質とそのおいたち 滋賀県高等学校理科教育研究会地学部会／編集 コロナ社, 2002 L 450.9 1・2	中高生から一般の人までが気軽に読め、また現地案内書としても活用できるよう工夫された滋賀県の地学ガイド。 初版に記載された全地点を再調査した１９８０年刊の改訂版です。 「近江盆地のおいたち」「滋賀県の地学めぐり」「滋賀県産鉱物一覧」「滋賀県産のおもな化石」「滋賀県内の地学関係研究機関・施設」などについて所収。
『日本の古生物大研究』 どこで見つかった？絶滅した生き物 冨田　幸光／監修 ＰＨＰ研究所, 2019 K 457	地球にはこれまで数えきれないほど多くの生き物が生まれ、そして絶滅してきました。遠い過去に生きていたけれど、いまはもう絶滅した生き物、古生物。古生代の海で栄えた三葉虫から、中生代の恐竜、新生代の浅い海にいた謎のほ乳類・束柱類まで、日本で化石が見つかった古生物などを、カラーのイラストや化石の写真で解説しています。 恐竜や古生物の化石が見られる全国の博物館も掲載。
『大むかしの動物』 新訂版 学研, 1994 K 457	大昔に栄えた生物には、どんなものがいたのか、どんな生活をしていたのか。 また、生物はなぜ移り変わっていくのか。 大昔の地層やその中から発見される化石を手がかりに、大昔の動物のくらしを写真とイラストで詳しく紹介しています。
『日本列島５億年の進化史』 日本列島のルーツ 今泉　吉典／〔ほか〕著 ニュートンプレス, 2001 457	５億年前から日本人の祖先が日本列島にわたってくるまでの歴史について、地質学・古生物学・動物学・人類学という４つの観点から解説しています。日本列島そして日本人のルーツについて理解を深めるための手引き。
『絶滅した日本の巨獣』 井尻　正二・犬塚　則久／著 築地書館, 1989 K 457	かつて日本にも巨大な獣たちが活躍していた時代があった。 草原にあそぶナウマンゾウ、波にうたれるデスモスチルスなど、失われた巨獣の世界が、日本各地から発掘された化石と、現生の動物から解き明かされます。 巻末には、巨獣の骨格や生態復元像が見られる展示館と、巨獣が見つかった地域の一覧表も掲載。
『古生物のしたたかな生き方』 土屋　健／著 幻冬舎, 2020 457.8	無気力だって立派な生存戦略！没落したら復活すればいい！あえてサイズダウンする！ 知れば知るほど感動する、古生物たちの究極サバイバル術を紹介しています。
『進化がわかる動物図鑑ゾウ・ハイラックス・ジュゴン』 ネイチャー・プロ編集室／構成・文 ほるぷ出版, 1998 K 457	ほ乳類がたどってきた進化の歴史と、現在地球上に生活するほ乳類を紹介するシリーズ。 カラー写真やイラストを使って、ほ乳類の進化をたどる中でのゾウやジュゴンの生態が紹介されています。初期の草食動物たちやマンモス、アフリカゾウとアジアゾウについて、海藻を食べる海牛や小型の草食動物の岩狸類などについても説明されています。

『大昔の動物』 学研,2000 K 457	地球に生命が誕生して３５億年。さまざまな生物が生まれ、絶滅しました。 今では生きている姿が見られないような、大昔の動物や近年に絶滅した動物を、生息していた年代順にならべて、詳しく解説しています。ゾウの進化の過程がイラストでわかりやすく紹介されています。
『日本の絶滅古生物図鑑』 宇都宮　聡・川崎　悟司／著 築地書館,2013 457	日本各所で発見された古生物のうち、同種類の中でも代表的と思われる特徴のあるものがピックアップされ、イラストとともに紹介されています。古生物マップ、発見記、コラム、恐竜や化石が見られるおもな博物館なども収録。
『ナウマン象の里　多賀町』 多賀町歴史民俗資料館 多賀町教育委員会 L 095.71	多賀町の基盤、琵琶湖のおいたち、地層が語る四手のむかし、多賀町とナウマンゾウ、ふるさと四手の森、四手の古琵琶湖層から出た化石などについて、写真やイラストを使って解説されています。
『象のいた湖』増補版 野尻湖発掘ものがたり 野尻湖発掘調査団／著 新日本出版社,1992 457.8	ナウマンゾウや野尻湖人など、野尻湖発掘をめぐる、様々な太古のロマンを紹介。増補にあたって、旧版以降の新たな発掘の成果が盛り込まれています。
『野尻湖のぞう』新版 井尻　正二／文 福音館書店,1980 K 457	１９４８年、野尻湖でゾウの歯と思われる化石が見つかりました。この化石は、ナウマンゾウとよばれる大昔に日本に住んでいたゾウの臼歯（奥歯）でした。 発見以来、幾度かにわたる発掘での調査結果をわかりやすく解説しています。
『タイムマシン化石号』 地学団体研究会『シリーズ・自然にチャレンジ』編集委員会／編集 大月書店,1987 K 457	楽しく読める化石についての入門書。 著者は日頃、地層や化石のことを研究している地学団体研究会の人たちで、化石採集の楽しさや化石の見方、化石の動植物が生きていた時代の読み取り方など、各ポイントをわかりやすく教えてくれます。
『たのしい化石採集』 井尻　正二・石井　良治／著 築地書館,1986 K 457	化石採集への準備、化石の採り方、クリーニングや整理の仕方、顕微鏡での見方などを小・中学生に向けてやさしく解説しています。 クラブ活動などの参考書としても活用できる一冊。
『ゾウの長い鼻には、おどろきのわけがある！』 山本　省三／文，喜多村　武／絵，遠藤　秀紀／監修 くもん出版,2008 K E ｿﾞｳ	動物の体の不思議や進化の秘密を明らかにしていく動物学者の研究を描くシリーズ。鼻を手のように使って、えさを口に運んだり、丸太を持ち上げたり、いろいろな動きができるゾウ。他にどんなことができるのか？どうしてゾウの鼻は長くなったのか？ゾウの鼻はほんとうに鼻なのか？ 鼻の仕組みが、絵本でわかりやすく解き明かされています。

※当館に所蔵している資料の中から紹介しています。ここに紹介した本以外にも関連する資料が他館に所蔵している場合もございますので、カウンターまでお気軽にお問い合わせください。